在自西ノ後遺跡第 7 次発掘調査

所在地　　：　福津市津屋崎 7 丁目 1588、1591
調査要因　：　宅地造成工事
調査期間　：　令和 5 年 9 月 28 日～令和 5 年 11 月 2 日
調査面積　：　370 ㎡
調査担当者　：　文化財課文化財係　髙木　慎太郎

■地理的・歴史的環境

在自西ノ後遺跡第 7 次発掘調査地点は現在の入海から約 600m 入った低地にあり、海抜は現況で 2.6m である。遺構面は海抜約 2.0m で検出した。本来は国道 495 号線の西側まで入海があったと考えられ、遺跡は海岸線に面するか極めて近い位置にあったと想定できる。当調査地は「唐坊地」の地名が残る場所に位置しており、日宋貿易に関わる遺跡であると想定された。過去の調査でも多量の貿易陶磁器をはじめ、木簡も出土している。

■検出遺構・遺物

【遺構】

溝状遺構 4 条、土坑 10 基、小穴多数

【遺物】

青磁片、白磁片、木杭、獣骨

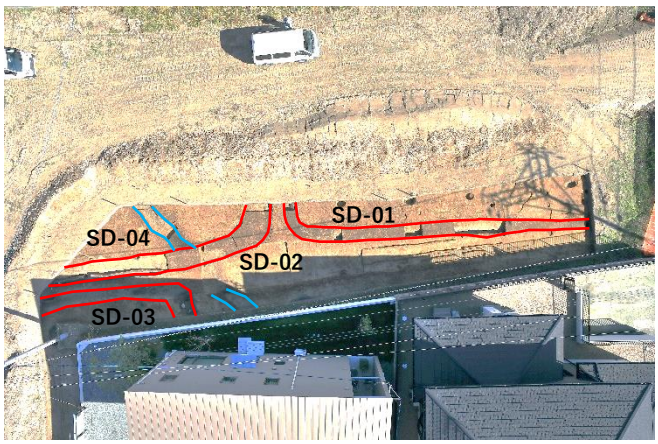
■所見

調査区は L 字状で南側（南北調査区）と東側（東西調査区）へ延びる。遺構は東西調査区に多く、溝・土坑・小穴を検出した。特に溝が多い。南北調査区は後世の耕作による攪乱が多い。東西調査区の溝は直線的に延びるものの他に、L 字状に屈曲するものがある。このうち L 字状に屈曲する溝は 3 条ある。1 つ目は東西調査区中央にあり、北側から東側へ屈曲している。幅 0.7～0.9m、深さ約 0.4m で断面逆台形を呈す。青磁片、白磁片等が出土した。2 つ目は東側へ延びる調査区中央にあり、北側から西側へ屈曲している。幅 1.1m、深さ 0.4～0.5 で断面逆台形を呈する。白磁片等が出土した。3 つ目は調査区の屈曲部分にあり、東側から南側へ屈曲している。幅 1.0m、深さは 0.4～0.5m で断面逆台形を呈する。底面に刺さった状態で木杭が 1 本出土した。この他にも龍泉窯系青磁片や獣骨等が出土している。以上 3 つの溝は土地区画溝になる可能性がある。南北調査区では溝 1 条、土坑 8 基、複数の小穴を検出した。溝は南北調査区の南側にあり、調査区南から北方向と西方向へ延びる。幅は 0.5～0.9m、深さは約 0.3m で断面は逆台形を呈する。この溝に重複して、土坑を 4 基検出した。このうち北側の 2 基については、土坑内に径約 0.1m の小穴があることから、柱穴になる可能性がある。土坑内からは陶磁器の小片が出土している。

以上のことから調査地は 15 世紀～16 世紀後半ごろの集落遺跡と考えられる。多数の区画溝が検出され、当時の地割を復元する際に有効な情報を得ることができた。区画溝との間（通路）が非常に狭小であることや、他地域の調査事例から商人達が暮らす区画であったとも考えられる。在自西ノ後遺跡の様相、引いては中近世都市の研究に際して重要な成果を得ることができた。

在自西ノ後遺跡第 7 次調査地点位置図（S＝1/2,500）

調査区全景（南から）



区画溝 SD-01・02・03・04 全景（南から）

区画溝 SD-05 全景（南から）

SD-03 出土木杭（西から）